

『サントスの御作業』と『黄金伝説』・その八

〈付〉——「様子」と「様体」について——

遠藤潤一

はじめに

本稿は旧『国文学科報・30』（最終刊・平成一四年）に掲載した「その七」に引き続き、福島邦道氏の『サントスの御作業・翻字研究篇』（昭和五四年・勉誠社）の本文と、前田敬作氏ほかの『黄金伝説』（昭和五四年～六二年・人文書院）の本文とを比較検討し、『黄金伝説』（略称（黄））との対応において指摘する必要のありそうな『サントスの御作業』（略称（サ））の箇所を拾い出してコメントを加えるという、（サ）の本文検討を目的としたものである。なお、（サ）はキリシタンの加津佐コレジオで刊行されたキリスト教聖人伝（二五九一年刊・日本語訳ローマ字本文）の福島氏の翻字本文であり、（黄）はヤコブス・デ・ウオラギネ編『レゲンダ・アウレア』（二二六四年頃成立、キリスト教聖人伝）の前田氏ほかの日本語訳文（底本は一八九〇年刊ラテン語本）である。

今回は「聖イグナチオ」の本文を検討する。

一 (13) 聖イグナチオ

（サ）における本章の章題は、

アンチオキヤのビスポ（司教） サントイグナチオ（没一七以前）の御作業、并にそのマルチリヨ（殉教）の様子。

これサンエウセビヨ（エウセビオス（二六三頃～二三九）・

『教会史』の著書）ビスポと、サンアントニノ（二三八九～一四

五九・フローレンス大司教）の記録なり。

とある。（振り仮名および括弧した注記は筆者。以下同様）。一方、（黄）では第一巻の「三六 聖イグナチオス」である。

本章では、まず筆者傍線部のように「マルチリヨの様体」ではなく、「様子」とあるが、（サ）で「様子」という語が用いら

れているのは、筆者の調査によるとこの一例だけである。(サ)の「言葉の和らげ」(巻末の語釈)では、「様子」は「すなわち「様体」とあり、「Ora Passa」とあるが、これは「成り行き」という意味であろうか。「様体」の方は挙げていないが、挙げるまでもない一般語と認識されていたからであろう。ということでは、「様子」は挙げて説明を要する新語(?)だったわけである。この語については本稿末尾で改めて言及することにした。

さて、(黄)の本章の冒頭は、

イグナテイオス (Ignatius) は、ignem patiens とおなじで、神への愛の〈火をかいくぐった人〉という意味である。

で始まるが、(サ)の方は、

トリヤノと申す帝王の時代に、サンジョアン エワンゼリシタ (福音史家) 九十九歳にして、死し給ひ、ゼズキリストへ参り給ふなり。同じ御宇にサンイグナチヨもマルチリヨを受け給ふなり。

で始まる。両者の内容は一致しない。

その次であるが、(サ)では

この貴き善人マルチル (殉教者) はサンジョアン エワンゼリシタの御弟子なり。アンチオキヤにてサンペドロ アポストロ (使徒) の後の三番目のビスポなり。

このサント (聖人) 貴きビルゼン (処女) サンタマリヤへ文を奉り給ふなり。その文に曰く。

とあるが、(黄)でも段落を改め、

イグナテイオスは福音史家聖ヨハネ (九章) (原本注) の弟子であり、アンテイオケイアの司教であった。彼は、聖母マリアにつきのような手紙を書いた。

となっている。つまり、ここから(サ)の(黄)との対応が始まるのである。

対応の概要を目次ふうに示すと次のようになる。

①イグナテイオスより聖母マリアへ宛てた手紙。

(サ) (段落) このサント貴きビルゼン マリアへ——(九二

頁)

②聖母マリアからの返信。

(サ) (段落) 貴きビルゼンこの文を受け給ひて、——

③あるとき山上で天使たちの詩篇交誦を聞く。教会における

詩篇交誦の由来。

(サ) (段落) サンイグナチオ或る山の上にて——

④キリスト教の平穩無事を神に祈る。

(サ) サンタエケレジャ (聖なる教会) の無事について——

(九三頁)

⑤皇帝トラヤヌスの凱旋、キリスト教徒への迫害。

(サ) (段落) 件のトラヤノ悪王、——

⑥イグナテイオス捕えられローマに連行される。途中、各地の教団に手紙を書く。

(サ) 然れば帝王それを搦めさせ奉り、――

⑦ローマ教団への手紙。

(サ) 又ローマのキリシタンにも――

⑧ローマ到着、皇帝の前に引き出される。

(サ) (段落) さればサント ローマへ上り給へば、――

(九四頁)

⑨拷問。

(サ) 帝王その時獄役ていやくの官人くわんにんに仰せて、――

⑩殉教。獅子の餌食にさせられる。

(サ) 三日目に獅子に喰らはせよとて、―― (九五頁)

⑪キリスト教徒が遺骸を引きとり、葬る。

(サ) この人の死骸を取らんと望む者あらば、――

⑫小プリニウスの皇帝への手紙のこと。

(サ) その時分ピリニオというゼンチヨ(異教徒)の学匠

――

⑬記録に残る逸話。

(サ) (段落) サンアントニノの宣はく、――

対応の概要は以上である。

右の対応部⑬では、(黄) は聖ベルナルドゥス(二〇九一〜一一五三・聖人)のイグナテイオス評が更に加えられており、それで本章が終わる。一方、(サ) ではサンアントニノの評で終わる。

以下は前回までと同様に、(サ)の本文解釈に必要と思われる

(黄)の対応部を挙げ、コメントを加えることにするが、今回は紙幅の都合でコメントを最小限に抑えたい。

13 | 1 (段落) このサント貴たつときビルゼン サンタマリアへ文ぶまを

奉り給ふなり。その文に曰く。デウス(神)にてましますぜ

ズキリストの御母おんははビルゼン マリヤへ御家人ごけにんなるイグナチ

オおつし謹んで申し上げ奉る。(九二)

(彼は、聖母マリアにつきのような手紙を書いた。「主キリ

ストをお孕みこもりになったマリアさまに挨拶をお送り申しあげ

るのは、イグナテイオスでございます。) 1 | 363

これは対応部①の例。右の内容の一致にまず注目したい。な

お「13 | 1」の「13」は本章に筆者が付した番号、「1」は引用

本文の一番という意味である。まず、(サ)の本文を掲げ(九二)

はその頁、次に、括弧して(黄)の本文を掲げる(1 | 363)

は第1巻363頁)。

この後統部は次のとおり。

いかに我が君、ジョアンの弟子新しきキリシタンなる我われを

御教化ごけうかをもつて喜ばせ、つよらせ給へ頼み奉る。

(あなたは、新入りのキリスト信者であり、あなたのヨハ

ネの弟子であるわたしを力づけ、慰めてくださらなくて

はなりません)。

(サ)の筆者傍線部、特に「新しきキリシタンなる」のあたり、

(黄)との対応によって意味が改めて確認されると言えるだろう(以下、本文中の傍線・波線はすべて筆者の付したもの)。

13 | 2 御子キリストの上に奇特不思議なることを聞き奉りて、驚き奉ることなり

(と申しますのは、わたしは、おん子イエスさまの偉大な奇跡を耳にして、たいへんおどろいてるのでございます。)前掲部の続き。(サ)の波線部「こと」はローマ字本文には無い(誤植と考えられる)。傍線部「奇特不思議なること」が(黄)の「偉大な奇跡」と対応する。

後統部は次のとおり。

御身は常にその御方に仕へ給ひつれば、御秘密をも知り給ふべければ、御口より真実を聞き奉らんと望み奉るものなり。その故は、我とともにここにあり新しきキリシタンも、御身より喜びを受け奉らんと存ずるのみなりと、書き終られしものなり。

(それゆえ、この点について、これらの話が真実ほんとうであるかどうか、あなたから確かなことをお教えたくださいとございます。なぜなら、あなたは、つねにイエスさまといっしょにおられて、イエスさまの秘密をすべてご存じでいらつしやいますから、このことも一番よく知っておいでだと存じます。それでは、ごきげんよろしく。そし

て、わたしとともにおります新入りのキリスト信者たちがあなたから、あなたによって、あなたにおいて力づけられたいとおもっておりますこの願いをかなえてくださいますように」と。

これでイグナテリオスのマリアへの手紙は終わる。(サ)の「その故は」は(黄)の「そして」と対応する。(黄)の「それでは、ごきげんよろしく。」が難解で、我々の通念ではここで手紙が終り、「そして」以下は追伸で、その内容(マリアによって力づけられたということ)と手紙本文の内容(イエスの奇跡のことを知らせてほしいということ)とは別件のように受け取りたくなるが、それは誤りであろう。この手紙の主旨は(サ)と同様に、マリアからイエスの奇跡の真実を教えてもらってそれを信者としての活力にしたい、ということである。

13 | 3 (段落) 貴きビルゼンこの文を受け給ひて、御返事に宣ふは、我が君にたまはますゼズキリストの御下女なる我、親しきイグナチオに無事を乞い願ふなり。(九二)

(聖母は、返事を送って、つぎのように答えられた。「選ばれた弟子でいらつしやる親愛なるイグナテリオスさまにキリストのいやしい婢女がお伝えします。)

1 | 364
対応部②のマリアの返書。(サ)の傍線部は「ご静穏を祈る」というような日本風の表現を感じさせる。この続きは次のとお

り。

汝の師匠なるジョアンの口より我が子の上について、聞か
れたるほどのこと皆まことなり。それを証拠とせられよ。
(あなたがイエスさまについてヨハネさまから聞かれたこと
は、真実です。あなたは、それらすべてのことを疑わず、
信奉なさらなくてはなりません。)

13 | 4 又パウチズモ(洗礼)に約束させられし如く、行跡も
違はぬやうに強き心をもつて届かれよ。(九二)

(そして、キリスト信仰をしつかりもつていて、それにのつ
とつてあなたの生きかたをお定めにならなければなり
ません。) 1-364

(サ)でも、生き方を間違えないように強い信仰心によって
一心にお励みになるよう、と言っており、主旨は(黄)と同じ。

13 | 5 ヒイデス(信仰)にゆるかせなく、難儀、氣遣ひに力
を弱らさず、汝のスピリツ(霊)の息災にてましますデウス
に喜び奉られよ。(九二)

(信仰のなかに雄々しくふみとどまり、迫害の猛威をおた
じろぎになりませんように。あなたの霊が強くあらわ
れ、神なる救い主のなかによるこびを見いだされますよう
に) 1-364

これでマリアからの手紙は終る。(サ)の傍線部であるが、ま
ず「息災にてまします」は「息災にてましまし、」(強壮でいらっし
やり)でなければならぬのではないか。次に「喜び奉られよ」
だが、これは「喜びを見出し奉られよ」(デウスの中に喜びを見出
し奉りなさい)となるべきところかと考えられる。

13 | 6 (段落) 件のトラヤノ悪王、或る時戦に運を開き給ひ、
大歡喜をもつて帰国し給ひ、キリシタンに対して種々おど
さるる沙汰ありしに、このサント道に出で向ひ給ひ、
あらはれて我キリシタンなりと名のり給ふなり。(九三)

(紀元一〇〇年に帝位についた皇帝トラヤヌスが戦争から
凱旋の途中すべてのキリスト教徒を殺すとおどかしたと
き、聖イグナティオスは、皇帝に走り寄って、自分はキリ
スト教徒であると公然と告白した。) 1-365

対応部⑤の例。これはトラヤヌスが帰国の途中のことである
から、(サ)の「帰国し給ひ、」は訳出としてどうか。「帰国し給
ふ途中で」とでもなっていないと以下の文脈がおかしくなろう。
なお、(サ)の「あらはれて」は(黄)の「公然と」と対応する。
邦訳日葡辞書で「アラワレテ」を引くと、「副詞」とし、語釈は
「明白に。または、皆の見る前で。」とあるが、この筆者波線部
の意味など(サ)の例にふさわしい。

13—7 然れば帝王それを搦めさせ奉り、鎖にていましめ、

十人の武士どもに渡し、ローマへ連れ上せて、獅子に投げ

与へよとの勅掟なり。さればアジアよりローマへ通り給ふ

とて、その在々のキリシタンを御教化なされ、エワンゼリ

ヨ(福音)のヒイデスと、この教へに届き、エレゼ(異端者)

に参会することを避けよと宣ふなり。(九三)

(トラヤヌスは、彼に足かせをはめさせ、十人の騎士たち

に彼をローマへ拉致せよと命じ、ローマへ着いたら猛獣

の餌食にしてやるぞと言つて彼をおどした。イグナテイオ

スは、ローマに連れていかれる途中、各地の教団に手紙を

書いて、確固として信仰を守りつつけるようにいたしました。

た。) 1—365

前掲部の続き。(サ)の傍線部「されば」以下は話題を転じて

イグナチオを主体として述べる。アジアを過ぎてローマへと進

み給ふと、前掲部と違って道中の出来事として述べており、

(黄)と一致する。波線部も対応するが、(サ)の「エレゼ」以

下は(黄)には無い。

13—8 又ローマのキリシタンにも文を遣はされ、マルチリ

ヨの冠を(受くる)妨げなきやうにと、頼み給ふなり。

その御文には、シリヤよりローマまであらげなきけだ

ものの如くなるものふに囲まれ行くなり。昼夜海陸とも

に獅子のごとくなる荒者十人に責めらるるなり。我より丁
寧にするほど、なほ情なくあたらるるなり。然れども、そ
のあらげなきをもつて我はなほ柔かになるなり。(九三)

(とりわけローマ教団の人たちには、『教会史』(一一〇ペー

ジ注二)に書かれているように、彼が拷問にかけられるのを

妨害しないようにたのんで、手紙にこう書いた。「あなたが

たに言つておきます。わたしは、シリアからローマまで海

上でも陸上でも猛獣たちと戦つてきました。日夜、十頭の

豹にしばりつけられていたのです。十頭の豹とは、見張り

人としてわたしにつけられた騎士たちのことです。彼らは

わたしの善行のためますます狂暴になり、わたしのほう

は、彼らの陰険さによつてますます教育されました。) 1

—365

対応部⑦、ローマのキリシタンへの手紙。(サ)の波線部

「(受くる)」は巻末正誤表における修正。(サ)の傍線部は対人

関係について述べているような感があるが、(黄)の「わたしの

善行」は必ずしも相手の騎士たちに向けられた行為ではなく、

根本的には信仰を守る行いを意味するものであろう。

なお、(黄)の『教会史』は(サ)の章題に登場する「エウセ

ビヨ」(エウセビオス)の著。

13—9 されども我を善人とは思はず、我がために与へられ

たるけだものは、我がために大果報なり。(九三)

(おお、わたしにおそいかかろうと手ぐすね引いている猛獣たちよろしく言つてやつてください。)

1-365

前掲部の続き。(サ)の波線部は前掲部に直接続き、ここで文が切れるのではないか。そして、「我がために」以下が(黄)と対応し、そこからは話題が転じ、猛獣による殉教を予測した内容となる。(サ)の傍線部は、私にとってこの上ない幸せだ、という意味だが、猛獣に感謝する言葉とも言えよう。猛獣によって殉教という目的が達成できるからである。(黄)でもそのような意味合いで、ローマの信者たちに「猛獣たちよろしく言つてやつてください」と頼んでいるのである。

13-10 つか来たるべきや? いつの日かそのとやより出

だして我を喰らはせらるべきぞ? あはれいつもよりあらけなく喰へかすと、我は深く望むなり。前代のマルチレス(殉教者たち)に対しては恐れて、爪をまかけざりし如く、我が上にはせざれかすと、宣ふなり。(九三)

(いっおそいかかってくるのか、いつ檻から放たれるのか、いつわたしの肉を食べることを許されるのか、と。わたしは、猛獣たちをわたしの肉を食べるように招き、そして、これまでに何人かのキリスト教徒たちをいたわったようにわたしをいたわることばやめてほしいと、彼らにたの

むつもりです。もし猛獣たちがためらったら、こちらから挑発をかけてやります。)

1-365

前掲部の続き。(サ)の波線部「——し如く、」の訳出はなんとなく生硬である。また、「宣ふなり」という訳出は誤訳であろう。主語は手紙の筆者自身なのであるから、「(私は)言はむと思ふなり」のような内容でなければならぬ。(黄)では「——と、彼らにたのむつもりです」となっている。

13-11 いかにかに兄弟、我には許されよ、我に似合ひたること

をよく知るなり。今こそゼズキリストの御弟子になり始め、願はくは、何たる骨肉の望み、何たる天狗の妨げもなかれかし。その故は、御助け手に相看し奉るべき功力に及ぶべければなり。(九三-九四)

(ですから、あなたがたにお願いします。どうか、わたしのことはそつとしておいて、わたしの受難を邪魔だてしないようにしてください。わたしは、自分にとってなにか役にたつかを知っているつもりです。)

1-365-366

前掲部の続き。(黄)では傍線部のように、ローマの人々に対して受難のさまたげをせぬようにと頼んでいるが、(サ)では受難のさまたげとなる人間的欲望や悪魔の誘惑が生じないように、神に祈っている。

また、(サ)(黄)の波線部前者の対応であるが、ともにこの

受難が自分にはふさわしいと言っていると解釈できよう。

波線部後者の対応では、(サ)は、この受難がキリストに對面がかなう功績となるからだ、と言っているが、(黄)の「自分にとってなにか役にたつか」も、この受難がキリストをわがものにするのに役立つ、ということ暗に述べていると受け取れる。

13—12 クルス、猛火、その外の苦患我が上に雨の如くに、降りかかれかし、猛きけだものも我が骨肉を破り、我が骨を砕けかし、ルシヘル(悪魔の名)がたくみ出だすほどの苦しみ我が上に皆来れかし。さりながらその合戦過ぎて、ゼズキリストともに運を開きたる喜びを遂げ奉るやうにと、乞ひ願ふものなりと、書き給ふとぞ。(九四)

(火、十字架、猛獸、手足をばらばらにされること、五臓六腑までずたずたに引き裂かれること——これらのことこそ、わたしの身のためになるのです。わたしがついにキリストをわがものにするまで、悪魔のわざが発明するありとあらゆる拷苦がわたしにおそいかかりますように) 1

—366

前掲部の続きで、ここでローマのキリシタンへの手紙が終る。(サ)の波線部で「さりながら」以下の大意は、しかしながらあらゆる拷苦との戦いが終って(殉教して)イエス・キリストと共に勝利の喜びを味わうことができるように、と言っているが、

この「さりながら」にこだわると、「拷苦」と「殉教」との因果関係の認識は(黄)の「——わがものにするまで、」の方が強く表れているような感がある。以下、ローマに到着し、皇帝の尋問を受け、拷問、殉教となる。

13—13 サント、帝も談儀を聞こし召し、キリシタンになり給へかしと存するなり。然らば、今の御威勢よりもなほ大きな国を御進退あるべし、と奉し給へば、(九四)

(聖イグナティオスは、答えた。「トラヤヌスよ、天主は、あなたが永遠の王国を手に入れるように、わたしがあなたを改宗させることをのぞんでおられます」 1—366

対応部⑧、尋問の一場面。(サ)の「——なほ大きな国」、この表現からは(黄)の「永遠の王国」(神の国)の意は読み取りがたい。

13—14 帝王これを見て、おきを持ち来たり、その上をはだしにて踏ませよと下知らせらる。サント、猛火も、熱湯も我にましますゼズキリストのカリダアデ(愛)を消すこと叶ふべからずと、宣へば、(九四)

(皇帝は、さらに言った。「石炭の燃えたのをもつてきて、そのうえを裸足で歩かせよ」イグナティオスは、叫んだ。「燃えさかる火もたぎりたつ熱湯も、わたしのなかのイ

対応部⑨、イグナテイオスが皇帝の命に従わないので皇帝は怒り、彼に拷問を加えるが、その一場面。(サ)の傍線部の(黄)との対応に注目したい。

なお、波線部の対応もおもしろい。(サ)は「おき(燠)」である。ギリシタン版『羅葡日対訳辞書』(勉誠社)では「Pruna」(燃えている石炭)に葡語で「Brafá」(おこっている炭火、おき火)を当て、日本語で「おき」と「炭火」を当てている。また、「Carbo」(木炭、炭)に葡語で「Carvão」(木炭、炭)を当て、日本語で、「焼炭」を当てる一方、「または(tem)」として葡語の「Brafá」を当て、日本語の「おき」をあてる例もある。前者の「Pruna」と「おき」の対応は(黄)と(サ)の対応と同じと言えよう。

13—15 この人は従ひなき慢気人なれば、それを搦めながら、獅子二匹に与へ、白骨をも残さぬやうに喰らはせよと言へり。(九五)

(皇帝は言った。「イグナテイオスは、高慢で頑固な男だから、彼をしばりつけておいて、ライオン二頭放つがよい。髪の毛一筋も残らないようにするのだ」 1—367
対応部⑩、ここから殉教の場面となる。

13—16 その時サント、いかにローマの人々よく心得給へ。

我いたづらなる所作をせず、悪を犯してこの成敗を受けず、ただデウスの御誉れと、善に対してこれをこらゆるなり。

我はゼズキリストの小麦なり、このけだものの齒よりくだかれて、清浄なるパンとなるべしと宣ふなり。(九五)

(そのとき、イグナテイオスは、つめかけた民衆に言った。「この戦いを見物するローマの人たちよ、わたしがこうして戦えば、かならず主のむくいがあるのです。というのは、わたしは、自分の悪業のためにこの責苦を受けるのではなく、自分の信仰心のために受けるのですから」『教会史』によると、彼は、さらに言葉をつづけて、「わたしは、キリストの種粒です。わたしが純粹なパンになるためには、猛獣の齒によつてすりつぶされねばならないのです」 1—367

前掲部の続き。(サ)の「我いたづらなる所作をせず」は、無益な行為はしない、という意で、(黄)の「——かならず主のむくいがあるのです」と対応する。

なお、(サ)の「我はゼズキリストの——」以下は(黄)の『教会史』によると、——」以下の内容と対応する。(サ)の本文がここで改行されているのはこのような意味があるのだろう。『教会史』は(サ)の本章の章題に出たエウセビオスの著作で、(サ)でもたとえば「エケレジャのイストリヤ」(第五章・聖ジヨ

アン)とか「イストリヤエケレジヤスチカ」(同上)として内容の引用されることがある。(サ)の本章はエウセビオスの記録にも拠ったとあるのだから、当然その『教会史』の内容も含まれてゐるものと考えられる。

13—17 獅子に向かひ給ひ、我をくらへとすすめ給へば、すなはち獅子二匹サントに近づき奉り、御喉おんのどをしめて殺し奉れども、少しも御肉おんにくをば破らずして、帰るなり。帝王これを見て、大きに驚き、この人の死骸を取らんと望む者あらば、制することなかれと、下知せらるるによつて、キリシタン取り、ねんごろに納め奉るものなり。(九五)

(ライオンどもを挑発しはじめ、おそつてきて自分を呑みこむようにそののかした。すると、二頭のあらくれライオンたちは、彼めがけてとびかかり、たちまち締め殺してしまつた。しかし、彼の肉には触れようとしなかつた。皇帝は、これを見てたいへんおどろき、「この人の遺体もらい受けにくる者があれば、けつして邪魔をしてはならない」と命令して立ち去つた。こうして、キリスト教徒たちは、彼の遺体を引きとつて、ねんごろに葬つた。) 1—367—368

改めて(サ)と(黄)との対応に注目する必要がある。波線部の偶然の一致、興味深いものがある。

以下、対応部⑫は殉教後の後日談、⑬は逸話である(逸話は(サ)では「サンアントニノの宣はく」とあり、(黄)では単に「記録によれば」とあるが、内容は同じ)。(黄)ではその後に聖ベルナルドゥスの賛辞が加わる。(サ)の本章はだいたい全体にわたつて(黄)と対応すると言えるのである。

二 「様子」と「様体」について

すでに述べたように、(サ)の「言葉の和らげ」では、「様子」は「すなわち、様体」とし、語義は「Ora pax」¹⁾としている。これは、「成り行き」という意であろうか。また、これは日葡辞書の「様子」の語釈「Maneira do negocio, ou do que paxa」²⁾の筆者下線部と同じと言える(邦訳日葡辞書では全体を「事件・事柄のりさま、または、成行の状況」と訳出している)。一方、日葡辞書の「様体」は「Modo, maneira」(邦訳日葡「様子・体裁」)である。つまり、日葡辞書では「様子」「様体」は語義のとらえ方が少々違う。「様子」の「Modo」は〈方法・手段〉の意であろう。「maneira」は〈方法・手段〉の意と共に〈状態・有様〉の意が考えられる。「様子」は〈状態・有様〉を〈経過〉のように時間的・過渡的にとらえているかのような感がある。一方、「様体」にはまず〈方法〉の意を無視できない。この辺をキリシタン版

『羅葡日対訳辞書』（勉誠社）で検討してみようとおもう。

羅葡日対訳辞書には「様体」が一〇例、「様子」が三例出る。まず「様体」からその語義を検討してみよう（用例は仮名書きとする）。見出しのラテン語、次にポルトガル語による語釈、次に日本語による語釈（用例）、の順序で示す。

① *Conditio*（一四七頁）。三番目の語義を「Item, condição」とし、「ヤクソクノ ヤウダイ」とある。「様体」は〈条件・状態〉の意と考えられる。

② *Descriptio*（二〇一頁）。葡語で「Definição, ordem」とあるが、これは〈分類・整理・秩序〉のような意であろう。そこに「シダイテイトウ（次第梯登）、ヤウダイ」とある。「様体」は〈方法〉の意か、〈状態〉の意か。

③ *Lex*（四一八頁）。三番目の語義に「Ité, condição」とあり、「ヤクソクノ ヤウダイ、シヤウ（仕様）」とある。「様体」は①と同じく〈条件・状態〉の意か。

④ *Locus*（四二七頁）。六番目の語義として「Item, Estado, ou fortuna」とあり、「テイ（体）、ヤウパイ（ヤウダイの誤り）、シндаイ（身代＝財産）」とある。「様体」は〈状態・有様〉の意であろう。

⑤ *Methodus*（四五八頁）。「Metodo, ou modo cum pédiço」とし、「ガクモン ナドノ チカミチ（近道）、又は、シヤウ

（仕様）、ヤウダイ」とある。「様体」は〈方法〉つまり〈仕方〉の意であろう。

⑥ *Modus*（四六六頁）。「Modo, ou regra」とし、「コロ（頭）、ミチ（道）、ヤウダイ」とある。「様体」は〈方法・手段〉の意であろう。

⑦ *Ratio*（六七四頁）。五番目の語義に「Item, Maneira, & modo」とあり、「ミチ（道）、ヤウダイ」とある。「様体」は〈方法〉の意であろう。この葡語の語釈は日葡辞書の「様体」の語釈と同じ。

⑧ *Semita*（七三三頁）。二番目の語義として「Item, Via, ou modo」とあり、「ミチ、または、ヤウダイ」とある。「様体」は〈方法〉の意と考えられる。

⑨ *Situs*（七四八～七四九頁）。六番目の語義として「Item, Sito, ou di/posição de algum lugar」とあり、「タタスマイ、トロロ（所）ノ ヤウダイ」とある。「様体」は〈状態・有様〉の意であろう。

⑩ *Via*（八七一～八七二頁）。四番目の語義として「Ité, Forma, maneira, ou modo」とあり、この筆者下線部も日葡辞書の「様体」の語釈と同じと言える。「モノ（物）ノ シヤウ（仕様）、ヤウダイ、ミチ」とあるが、この「様体」も〈方法・仕方〉の意であろう。（例⑦参照）

以上であるが、まず例⑤・⑥・⑦・⑧・⑩に注目すると、こ

これらの「様体」は「近道」「道」「仕様」と共に出る。そして、〈方法・仕方〉の意が抽出できる。葡語の語釈には「modo」「maneira」という語が出るが、前者は〈方法〉という意で、後者は〈方法・状況〉の意で用いられていると考えられる。日葡辞書での「Modo, maneira」を邦訳日葡辞書では「様子・体裁」と訳出しているが、羅葡日対訳辞書のこれらの例から考えると、「方法・状態」と訳出する方がよいのかも考えられる。

例③も「仕様」と共に出る。例①・例②も、〈条件・秩序〉の意と共に〈方法〉の意が読み取れる。そして、〈状態〉の意がまづ読み取れるのは、「テイ(体)」と共に出る例④と、「タタズマイ、トコロ(所)ノ ヤウダイ」という例⑨だけであろう。

次に「様子」の三例であるが、これらはすべて「様子を」という形で用いられている。

- ① Efficio (二二三三～二三四頁)。これには「Lus. O exprimir com palauras a forma. & composição de algum corpo.」とあり、「モノ(物)ノ ヤウスラ アリノ ママニ コトバ(言葉)ヲ モツテ アラワス コト ナリ。」とあるが、「様子」に当たる語を右の葡語の文から抽出すると「forma」(形態・状態)が挙げられる。

- ② Pontificalis (六〇〇頁)。三番目の語義「Pontificales libri」(大祭司の文書)に、「Luros em q efram efcritas as cerimoniais

agradas.」とあり、「オコナイ(行い)、ギャウジ(行事)ノ ヤウスラ カキシルシタル(書き記したる) ショ(書)」とある。「——行事の様子を」とあり、「様子」は〈次第〉〈状態・有様〉の意と考えられる。

- ③ Subiectio (七八〇頁)。「O representar, ou de/creuer ao viuo agua couja」とあり、「ヨク マネ(真似)ヲ スル、又は、トコロ(所) ナドノ ヤウスラ アリノ ママニ カク(書く) コト ナリ」とある。「——所などの様子」とあり、この「様子」も〈状態・有様〉の意であろう。

以上であるが、これら三例の「様子」は葡語の文を説明した日本文の中にたまたま用いられている例で、見出しのラテン語や葡語と直接対応する例ではないが、その日本文の文脈から判断し、概括すると、すべて〈状態・有様〉の意で用いられていると言えるだろう。(サ)の「言葉の和らげ」では、この意を時間的・過渡的にとらえたものかと考えられる。

さて、ここで本章の問題に立ち返ってみると、「マルチリヨの様体」は〈殉教の方法・仕方〉の意かと考えられ、「マルチリヨの様子」は〈殉教の有様・状態〉の意かと考えられることとなる。羅葡日対訳辞書で検討すると、このようになるわけである。

本章は他の章と異なり、手紙文が章の前半を占め、他の章の

ような、聖人が異教徒との闘いの末に殉教するという、いわば殉教の「様体」〈方法〉としてとらえられる躍動的な話の筋がない。そこで、章の後半部のローマ到着以後の拷問、そしてライオンによる死刑という殉教の場面に焦点が合わされ、その場面性を強調するために、たまたま「様子」〈有様〉という語が用いられることになったのか——とも考えられるが、いかがなものであろうか。

キリシタン版で「様子」の出る文献は、筆者の調べた範囲では、日葡辞書・羅葡日対訳辞書・落葉集・ロドリゲス日本大文典、であるが、語義について多角的に検討できる資料としては羅葡日対訳辞書しかなかった。